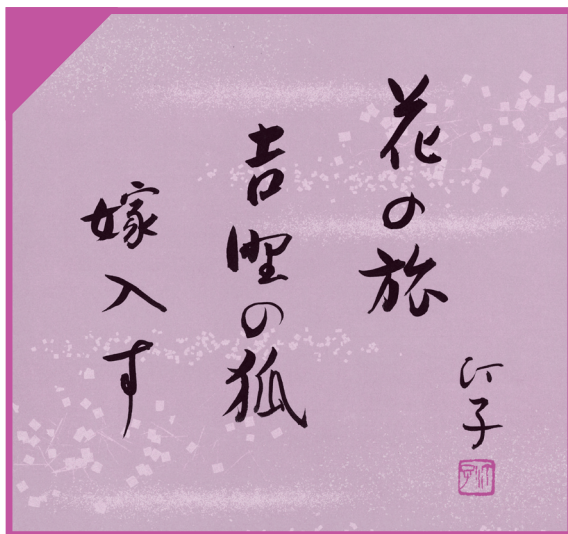


詠 詠 集

十 月 号



花鳥諷詠®



令和4年10月 ■ 第415号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	岩岡 中正 2
	岩谷 塵外 4

虚子研究 『六百五十句』 研究 (32)	7
----------------------------	---

虚子研究 虚子宛書簡を読む (三十九)

明治二十五年九月二十一日 池内政夫書簡 (封書)

.....	棕 誠一郎 14
-------	----------------

一頁の鑑賞	音羽 紅子 16
	宮内 千早 17

この人の作品	丹野 慶子 18
--------------	----------------

第十七回国際俳句シンポジウム①	19
-----------------------	----

カレンダーこぼればなし①	26
--------------------	----

新刊紹介	27
------------	----

風報	28
----------	----

HIA 第24回俳句大会 (表彰式)	30
--------------------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

花鳥諷詠選集

岩岡中正選

特選五句

唐突に風鈴売りの出発す

名古屋 斉藤 始子

煮て焼いて漬けてまだある茄子かな

岩倉 村瀬 みさを

思春期の横顔見やりつつ端居

高松 白根 純子

一願に涼しき風の来るかな

金沢 森田 康夫

雷に道を行く人真顔なり

高知 田村 裕子

二句短評

一句目——音も色彩も、いかにも夏らしく明るく賑やかな「風鈴売り」。「唐突に」「出発す」と一瞬時を止めて動き出す瞬間をとらえた写生が、的確でダイナミックで、新鮮。

二句目——茄子のいのちの豊饒への手放しの讃歌。「煮て」「焼いて」「漬けて」に加えて「まだある」というリズムにも、作者の感動と感謝がある。体丸ごとの写生である。

入選六十句

炎天や脚より上り来る疲れ 柏 内田 秋歩

雨あとの水の濁りや半夏生 君津 榎本 静江

十葉の匂ひを干してをりにけり 松山 篠原みどり

夕風に郵便船の帰りくる 昭島 亀井 榮弘

蜘蛛の囀の輝いてゐる高さかな 徳島 遠藤 和良

羽脱鳥咽ごとりと鳴らしたる 島原 三好 立夏

蟻の道吾に諷詠の道のあり 大牟田 石橋 武子

粒となり光となりて滴れる 加古川 岩城 久美

すらすらと黴の字書けて女将かな 熊本 西 美愛子

ダム架けて夏の連山緩ぶなし 砺波 田上真知子

堂縁に四葩の雨の匂ひけり 高松 信里由美子

木々は揺れ山はゆるがぬ青嵐 宇部 萬 洋子

海の日や征きし父待つとこしなへ 豊橋 藤本 慈子

水かけてやる沢蟹の逃げもせず 七尾 坂下 成絃

退院の日の白靴とハンチング 西宮 本郷 桂子

盆果てのひとりに戻る部屋を掃く	松原 加藤 あや
香水のほのかといふをたしなみに	高知 坂本喜代子
小さき手を開けば翔ちぬ天道虫	高松 久本 照代
紫陽花の毬に手荒き今日の降り	金沢 篠島 安子
ほうたるの去にて梢に点る星	小松 橋本 正乃
ボート屋の総点検や夏に入る	福山 廣本 貢一
流行を少し氣にして更衣	神戸 平岡 良一
青嵐青狂ほしく狂ほしく	箕面 須知香代子
バリウムの口拭き直し街晩夏	高山 大下 雅子
杜薄暑風の一等席に鹿	天理 松田 吉上
旅に買ふ薬くつ下夏帽子	鹿児島 手打 桃果
どこまでも影引き連れて炎天下	浜田 三沢 孝子
日盛や浮棧橋の軋む音	吹田 河辺さち子
帰省子に譲る田畑を見て廻る	西予 末光恵美子
大きな計いつせいに止む蟬時雨	吹田 小井川和子

ひとすぢに汀子の滝の轟けり	仙台 赤間 学
一まいの葉うら葉おもて夏落葉	青森 長島 喜美
被災地の向日葵みんな上を向く	宇佐 尾崎 陽子
みづうみを喜雨が叩いてゐたりけり	高島 貫野 浩
兄吹きし草笛いつも海行かば	神戸 日下 徳一
合歓咲いてその下にゐる渡し守	名古屋 幅 みや女
まづグラス磨きて咲かす水中花	芦屋 勝田 展子
鉾ぎいと廻りて暮るる祇園かな	高知 駒木 基克
羅の風のにはひに振り返る	山形 加藤わか子
木洩日に病葉しんと降りにけり	宮崎 岡本 和子
海山の風入れ替はる夏座敷	神戸 池田雅かず
文月や心に響く一筆箋	豊後高田 大波多美妃
占ひの好きな子と見る流れ星	小樽 岩崎スイ子
見上げればまだ濡れてゐる空に虹	伊賀 永井二紗子
涼しさや骨隆々と恐竜館	金沢 米田 陽子

● 岩谷塵外選

特選五句

芦屋川三代句碑の涼しさよ

東京齋藤澄子

七夕の願ひ戦のなき世界

朝倉井手ちくの

五月雨やガラシャ夫人の手水鉢

福岡沖永洋美

デイゴ咲く南の島に果てし父

高松琴田照代

兄吹きし草笛いつも海行かば

神戸日下徳一

二句短評

一句目——掲句は、伝統俳句の歴史の重みと汀子師から折々教授された句作の要諦を、改めて思い起こす機会を与えてくれた。季題「涼しさよ」が、公園に鎮座している句碑の風格を的確に捉え、感慨深い俳句となった。

二句目——リアルタイムで茶の間に飛び込んで来るウクライナ戦争の惨状は眼を覆うばかりである。もはや平和は星々に祈るしか無いのかもしれない。次世代に「戦のなき世界」を残したいと切に考えさせられた一句である。

心地よき風を枕に三尺寝 高松 宇和川 厚

追悼の言葉涼しく胸を打つ 三田 吉村 玲子

香水の強き人あるエレベーター 伊賀 松村 咲子

人を待つやうに涼風待つてをり 高松 岩瀬由美子

通学は一列縦隊青田道 太宰府 野田 杉子

大寺のひやりと夏の天井絵 岩倉 春田 玉子

山開ケルンを一つ積み足して 大阪 西川寿賀子

あをあをと匂ふ茅の輪をくぐりけり 八代 山下さと子

裸婦像の胸の高鳴り大夕立 根室 前田 水絵

真葛原かつて五軒の暮らしあり 島根 佐々木ミチ子

真つ直ぐに進む蚯蚓よ生きのびよ 前橋 戸所 理栄

はんなりと京の夕立でありにけり 芦屋 奥田 好子

一つ灯に遣句集を恋ふ夜の秋 宮若 菅井久美子

浦の子の腕白ざかり雲の峰 鹿児島 亀割 芙蓉

孤独もてあます新宿誘蛾灯 広島 前田 節

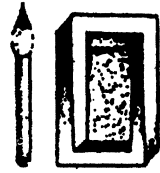
入選六十句

田草取り里の小昼は吉備団子	北海道	西澤カズ子
向日葵や笑顔は世界共通語	高知	井上真知子
手の平は自在な器岩清水	荒尾	大川内みのる
四冊の御朱印帖を繰る端居	金沢	荒谷みえ子
ボートはや湖岸の鳥居くぐるかに	藤岡	清水 静子
朝靄の静寂のなかを鮎売来	大津	あびら曄山
堂縁に四葩の雨の匂ひけり	高松	信里由美子
風音に語尾攫はるる行々子	輪島	向 佐ち子
甘酒が唯一のメニュー峠茶屋	山口	椿 壽子
真つ直ぐも少し曲るも初茄子	平戸	辻 美彌子
百葉箱塗りなほされて夏初め	札幌	押野 美江
鮎釣れしときは水音消えてをり	神戸	田附 光映
戦ひの日焼が勲章球児達	金沢	石名坂房枝
江の島の沖にカラフルヨットの帆	島原	西田比呂志
島の名のラベル見て買ふ夏蜜柑	福岡	古野ふじの

紫陽花の毬に手荒き今日の降り	金沢	篠島 安子
干し蛸の躍る軒先大南風	神戸	上岡あきら
萱茸きの老舗にひさぐ笹粽	山形	荒井 朋枝
杜薄暑風の一等席に鹿	天理	松田 吉上
大玉も小玉も同じ西瓜苗	阿南	かつせ千津
てつぺんに武士据ゑて山車披露	高崎	吉井たくみ
梅雨寒の老老介護始まりぬ	高松	多田てい子
歩みたき緑と登りたき緑	鹿児島	柳橋かすみ
石仏の褥となりて苔の花	磐田	金田みな子
傷跡に詫びの一言漆搔	和歌山	市ノ瀬翔子
モカシンの靴を跣足で履き若し	小樽	遠藤 嶺子
風筋を描きては消して麦の秋	大阪	山内 繭彦
白樺の風をロビーに夏館	西宮	宮本 露子
梅雨明や海のまぶしき三角線	熊本	今福 公明
滝つ瀬に魚の道あり鮎遡上	伊賀	藤井 光子

山登褻事の憂さを捨ててに行く 長崎 伊藤ひとみ	掃苔は現地集合日曜日 埼玉 藤井 光子	海山の風入れ替はる夏座敷 神戸 池田雅かず	まだ雲を映す余白のある青田 岡山 名木田純子	七夕の多の願ひに撓る竹 金沢 中村 直美	蛸一匹入れて携げ来る箱眼鏡 洲本 高田 菲路	遊ぶ子の影に重ねてやる日傘 高知 伊野部哲也	箱庭の昭和のままの水車小屋 八尾 浅井 祥多	薔薇アーチ潜りてよりのばら見会 小松 松本 洋美	一杯のワイン一人の夏料理 室戸 山本 千秋	雲の峰ひつくりかへし逆上がり 下関 中村 元代	店頭に四つ切り八つ切り丸西瓜 吹田 八木 徹	遠雷に急かされてゐる庭手入れ 安中 多胡恵美子	煮て焼いて漬けてまだある茄子かな 岩倉 村瀬みさを	帰省子に譲る田畑を見て廻る 西予 末光恵美子
---	---	---	--	--	--	--	--	--	---	---	--	---	---	--

角番の意地の一勝汗光る 石川 水橋眞智子	はんなりと京の夕立でありにけり 芦屋 奥田 好子	植田はや色にも力見えてきし 島原 原 典子	追山笠の地響き雨の厨まで 春日 本田 久子	月見草朝は眠たき色をして 米子 前田 千	設ひに亭主の心夏座敷 神戸 長谷 元子	鉾立の四条大路へ山動く 武蔵村山 福留 和江	磴上り切れば山門風涼し 我孫子 柳沢いわを	今年又丹精の枇杷送りくれ 郡上 曾我とし子	山開ケルンを一つ積み足して 大阪 西川寿賀子	帰省して先づ仏壇の父に逢ふ 西脇 本多みどり	一山を負うて立ちたる茅の輪かな 高知 片岡 幸枝	漕ぐ水のもたりと重きボートかな 東京 青園 直美	通学は一系列縦隊青田道 太宰府 野田 杉子	水打つて風に潤ひ生まれけり 八尾 藤井ケイ子
--	--	---	---	--	---	--	---	---	--	--	--	--	---	--



編集後記

又弔句したため秋を惜みけり

汀子

平成六年の句。『稲畑汀子俳句集成』の「未刊句集 風の庭」に掲載されている。祖父である虚子も「挨拶句の名手」であったが、汀子名誉会長もどれだけの弔句を詠まれたことだろう。二月にはその御本人が帰天、五月に稲岡長元副会長、八月には柴原保佳顧問、そして小川龍雄副会長が鬼籍に入られた。弔句の数だけ淋しさがつる。

●令和五年の俳句カレンダーは、この編集後記を書いている時点で、完成までもう少し。帯広での全国俳句大会の会場で見本を披露する予定です。なお、カレンダーの送料を九部以上宅急便着払いとお知らせしていましたが、八部以上に変更になりました。お詫びして訂正させていただきます。関係各位にもご迷惑をおかけし申し訳ありません。

●この夏、実験的に開催し、好評を博したりモート講座。その第二弾を今冬開催します。テーマは「歳時記」。山田佳乃監事、成田一子理事のお二人が講師となります。申込等詳細は決定次第ウェブサイトでご紹介します。

●俳句四協会は、俳句のユネスコ文化遺産登録に向けて活動を続けています。その中心となっている国際俳句交

流協会の俳句会で、当協会の岩岡中正会長が講演をいたします。なんと、幕末に海外に漂流した、会長の御先祖のお話とか。楽しみです。(30ページ参照)

須川 久

花鳥諷詠十月号(通巻第四一五号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年十月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八一九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九一二